

要 旨

日本における「環境音楽」

——その意味の変遷——

新川 愛

現在、日本において「環境音楽」という語は様々な意味合いで使用されており、「環境音楽」と呼ばれている音楽・芸術実践は多種多様である。バックグラウンド音楽、アンビエント・ミュージック、音響彫刻、サウンドスケープ等、数多くの「音楽」を包括する語として使用されてきた「環境音楽」という語が意味するものとはいったい何であるのか。また、どのような概念が「環境音楽」として語られてきたのであろうか。

本稿では、日本において「環境音楽」という語が使用されはじめた1960年代から現在までの文献より、特にその時代思潮を代表すると思われるものについて、年代をおって検討していく。しかしながら、帰納的な方法によって「環境音楽」の定義を抽出することは行わない。本稿の目的は、実証的な研究から意味の変遷を明らかにすることにより、「環境音楽」とはどのようなものであったのかを考察するための足掛かりとなることである。

本稿は以下のように構成されている。第1章では、日本で初めて「環境音楽」という語が使用されたと推測される1965年から、ブライアン・イーノによってアンビエント・ミュージックが提唱された1978年までの文献を5つ選出した。この時期の特徴は、経済的効率化を目的とした「放送用音楽」の使用等、音楽がもたらす「望ましい効果」について科学的根拠により述べられていることであり、そのような効果を発揮させるよう計画されたものとして「環境音楽」が紹介されている。また、生産性を向上させるための「放送用音楽」とは別の、思想としての「環境音楽」が徐々に輸入され始めた。

第2章は1979年から、バブル経済が崩壊し景気が後退したとされている1992年

までである。しかしながら、この章では1980年代半ばの文献のみ、5つを検討している。「環境音楽」という語が市民権を得はじめたこの時期には、バックグラウンド音楽やアンビエント・ミュージック等の音楽を「環境音楽」としている新聞や雑誌記事が数多く存在するが、本稿では紹介に留めておく。ここでは「環境音楽」についての論考集『波の記譜法』所収の論を中心に検討しており、その特徴は、環境との関わり方や音に対する「きき方」等に焦点を定めて「環境音楽」という語について述べられていることである。

第3章では1993年から2016年までの文献のうち、4つを選出した。音楽再生機器の小型化によって聴取体験の個人化が進むこの時期において、「環境音楽」という語は消費される「音楽」にも使用されるようになる。また「環境音楽」と呼ばれるものが「音楽」としてではなく「空間」のひとつの要素として扱われるようになり、空間デザインや音環境デザインそのものに対して「環境音楽」という語が使用されている。

以上の展開により、日本における「環境音楽」という語の意味の変遷を明らかにした。しかしながら、「環境音楽」という語の意味は必ずしも上記のような年代ごとに区切られるものではなく、絶えず変化している。